

教会月報

No.526 (2022年10月23日)

【2022年11月号】

日本キリスト教団埼玉和光教会
〒351-0114 和光市本町 15-50

「主の家にわたしは住む」

岩河敏宏

詩編 23 編 5 節～6 節

5 わたしを苦しめる者を前にしても
あなたはわたしに食卓を整えてくださる。
わたしの頭に香油を注ぎ
わたしの杯を溢れさせてくださる。

6 命のある限り

恵みと慈しみはいつもわたしを追う。
主の家にわたしは帰り
生涯、そこにとどまるであろう。(傍点；筆者)

詩編 23 編は、「主はわたしの羊飼い」という書き出しで始まります。「神は救いです」というのと、「神はわたしの救いです」というのとでは雲泥の差があります。「わたしを休ませ」「わたしを導き」「わたしを力づけ」「わたしを養う」「わたしの神」、この事実を、どこまでも私事として知ること(経験すること)は、重要なことです。今回は、この詩篇から、羊飼いと羊の関係であらわされる前半の部分(1節～4節)ではなく、自分の食卓に招く主人と客人の関係であらわされる後半の部分(5節～6節)に焦点を当てます。「あなたはわたしの敵の前で、わたしの前に宴を設け、…」(口語訳；5節)とあるように、砂漠で強盗に追われた旅人(わたし)が

天幕に逃げ込み、その天幕の主人(神)が彼を保護し、追跡してくる敵の前で歓待する。それに続く「恵みと慈しみが追いかけてくる」(6節)は、“敵が追跡してくる”と連動する表現で、敵に追われたこの身が今や神の恵みと慈しみに追跡されるというもので、神の護りの力強さが示されています。食卓に招かれるということは、ユダヤの世界では最高のもてなしです。食卓に招くことは相手に対する親密さを表わし、招く客人に最大級の好意をもって歓迎していることのしるしです。神の惜しみない歓迎、極めがたい祝福を知った時、「生涯、そこにとどまる(主の家にわたしは住む)」という誓いでこの詩が締め括られています。

現在に眼を向けても、類似する状況があります。子どもたちは、社会の指標(学力・適用力・協調性など)に追われています。私たちも同じです。この現代社会にあって、息苦しさを覚えている人は多くいます。主の家である教会が“食卓を整え、魂を生き返らせる”場、多くの人に「主の家にわたしは帰り、生涯そこにとどまる(住む)」憩いの拠点となっているだろうか。教会が、子どもから大人まで集う客人に寄り添い歓迎し、“主の家(教会)に住みたい”と感じてもらえる場とならなければ。